

## 「戊辰戦争と宇都宮城」

江戸時代の日本は、鎖国政策（外国との付き合いをしない政策）をとっていましたが、18世紀末頃以後、諸外国からは開国（国交を樹立し、外交や交易などを行なうこと）の働きかけが強くなりました。しかし、江戸幕府はたびたびその要求を拒否していました。

嘉永6年（1853年）、アメリカ合衆国のペリーは、軍艦4隻を率いて浦賀（神奈川県横須賀市）に来航し、幕府に対し強硬に開国を要求しました。国内ではさまざまな議論がわき起こりましたが、翌年、日米和親条約が締結され、200年以上続いた鎖国は終わりました。

日本は、世界の政治や経済の流れに巻き込まれることになり、幕府の権威は大きく揺らいでいきます。そのなかで、幕府による政治をやめて、天皇中心の政治にするべきだという動きが強くなっていきました。国のあり方をめぐって大きな混乱が生まれたのです。

ついに、慶応3年（1867年）、15代将軍・徳川慶喜は、政治の権限を幕府から天皇に渡すことに決めました。これを大政奉還といいます。しかし、幕府を支持する人々はこれを不満に思っていました。一方、天皇中心の政治をしようとする薩摩藩（鹿児島県）・長州藩（山口県）などの人々は、幕府を徹底的にうちこわす必要があると考えていました。

両者は慶応4年（1868年）鳥羽伏見（京都市）で衝突して戦争が起こり、以後、幕府を支持する勢力と、薩摩藩や長州藩などが中心となって組織された新政府が、戦いを繰り広げることになります。新政府の軍隊は京都周辺で幕府軍を破り、その後、幕府に味方する勢力が強い関東・北陸・東北地方を攻めるため、東へ向かいました。

この一連の戦いを戊辰戦争と呼びます。そしてこの戦争が、宇都宮城と宇都宮のまちの運命に大きくかかわることとなるのです。

（つづく）

## 戊辰戦争と宇都宮城

### 「宇都宮城をめぐる最初の戦い」

新政府軍の事実上の指揮官であった薩摩藩（鹿児島県）西郷隆盛は、江戸幕府を徹底的に打ち壊すため、江戸城を攻撃するつもりでした。しかし、幕府の代表・勝海舟が江戸城を明け渡すことを提案したため、江戸を舞台とした大きな戦争はありませんでした。

しかし、幕府を支持する人々は、上野（東京都台東区）にたてこもって戦ったほか、東北地方や北海道を根拠にして新政府に対抗することを企てる人々もいました。

一方、宇都宮藩では、中老・梶信緝（六石）の主導のもとに、新政府に味方することがきまっていました。宇都宮藩が援軍を要請したため、新政府軍の部隊が4月7日に宇都宮城に入っており、この部隊が旧幕府軍と戦うこととなります。

北へ向かう旧幕府軍は、慶応4年（1868年）4月12日に江戸を出発、下総国国府台（千葉県市川市）に集結して隊列を整えました。そして、三隊に分かれて北上を開始し、相次いで下野国（栃木県）に入りました。その指導者は、幕府の歩兵奉行・大鳥圭介、新撰組副長・土方歳三、会津藩士・秋月登之助などです。

大鳥の率いる隊は、小山（小山市）で新政府軍を破り、栃木（栃木市）を経て鹿沼（鹿沼市）方面に向かいました。

一方、土方や秋月の部隊は、鬼怒川に沿って北上、現在の真岡市付近で鬼怒川を東から西へ渡り、満福寺（上三川町東蓼沼）に陣営をおきました。

4月19日朝、土方らの旧幕府軍は、捕虜となっていた黒羽藩（大田原市）の藩士3名を死刑にして気勢をあげた後、進撃を開始しました。

こうして宇都宮城をめぐる最初の戦いが始まったのです。

(つづく)

## 戊辰戦争と宇都宮城

### 「旧幕府軍の攻撃」

旧幕府軍は、宇都宮城の構造を研究して南東側の守りが弱いことを知っていました。そこで<sup>やなげ</sup>築瀬村（築瀬町）方面から攻撃する作戦をたてました。

一方、新政府軍として宇都宮城に駐屯していたのは、宇都宮藩に加え、<sup>ひこねはん</sup>彦根藩（滋賀県）・<sup>からすやまはん</sup>鳥山藩（<sup>なす</sup>那須<sup>からすやまし</sup>烏山市）などで、指揮官は<sup>みとはん</sup>水戸藩（<sup>いばらき</sup>茨城県）出身の香川敬三でした。

宇都宮城は、<sup>しもつけのくに</sup>下野国（栃木県）各地での戦いに部隊を差し向けたため手薄になっていました。香川は新政府軍の本部に援軍を要請していましたが、それが到着する前に攻撃を受けることになったのです。

新政府軍は、<sup>たでぬま</sup>蓼沼（<sup>かみのかわまち</sup>上三川町）から北上してくる旧幕府軍を迎え撃つため、<sup>ひらまつ</sup>平松村（平松町）などに展開しました。宇都宮城主・<sup>とただゆき</sup>戸田忠恕も各隊を巡視して励ましたといえます。

新政府軍は、旧幕府軍が平松方面から攻めてくると予想していましたが、ところが実際には二手に分かれ、一隊はそれよりも西側の道を取り、<sup>すなた</sup>砂田村（砂田町）・<sup>しもぐり</sup>下栗村（下栗町）を經由して来たのです。

旧幕府軍は「<sup>とうしょうだいごんげん</sup>東照大権現」（<sup>とくがわいえやす</sup>徳川家康の<sup>しんごう</sup>神号）と記した<sup>のぼり</sup>幟を立て、進軍ラッパを吹き鳴らしながら攻撃してきました。

新政府軍は即座に打ち破られ、<sup>しゆくごう</sup>宿郷村（宿郷）方面に退却。旧幕府軍は築瀬村に進攻し、民家に火を放ちながら、築瀬橋で田川を渡り、<sup>しもがわら</sup>下河原門（<sup>おくら</sup>御蔵町）に押し寄せました。

（つづく）

## 戊辰戦争と宇都宮城

### 「城下町の大火災」

下河原門（御蔵町付近）を守備していた新政府軍は、宇都宮藩を中心とする部隊で、香川敬三が自ら指揮をとっていました。

戦いは、鉄砲の撃ち合いで始まりましたが、旧幕府軍は築瀬橋を渡って次々と攻め寄せてきます。宇都宮藩の戸田三左衛門らは、槍を持ち、門を開いて突撃し、下河原門前で激しい戦いが行われました。

しかし、旧幕府軍は攻撃の手を緩めず、ついには宇都宮藩主の居館である二の丸御殿（中央3丁目付近）にまで銃弾が飛来するようになりました。また、このころには。築瀬村の火災が強風にあおられて城下町に延焼し、大火災となっていました。

そのため、香川は戸田忠恕に対し、北へ避難するように進言。忠恕は数名の家臣とともに新里村（新里町）に向かいました。

宇都宮藩の中老・梶信緝（六石）は、下河原門に行くため、本丸（本丸町付近）を経て小野森門（旭2丁目付近）に向かいましたが、すでにその周辺でも路上に兵士の遺体があり、重傷を負った兵士も運ばれてくるというありさまでした。そして、かろうじて下河原門に近づいたものの銃弾が次々と飛んできて立って歩くことができず、地面を這うようにして味方のところまでたどり着きました。

この状況の中で、梶は香川と協議し、宇都宮城から一時退却して、援軍の到着を待って反撃することとしました。鹿沼（鹿沼市）方面にいる旧幕府側の大鳥圭介の部隊や、南下してくる会津藩（福島県）の部隊に包囲されることを恐れたのです。

（つづく）

## 戊辰戦争と宇都宮城

### 「宇都宮城からの脱出」

香川敬三<sup>かがわけいぞう</sup>と梶信緝<sup>あがたのぶつぐ</sup>は、二の丸御殿前<sup>に まるごてん</sup>（中央2丁目付近）に兵士達を集合せ、城から退却することを命じました。そして一同は城に火を放ったのち、大手門<sup>おおてもん</sup>（中央1丁目付近）を出て西に向かいました。宇都宮藩主の戸田家<sup>いんせき</sup>と姻戚関係にあった館林<sup>たてばやし</sup>（群馬県館林市）藩を頼るとともに、板橋<sup>いたばし</sup>（東京都板橋区）にあった新政府軍の総督府<sup>そうとくふ</sup>（司令部）に援軍を求めためです。

宇都宮藩の部隊は、旧幕府軍の追撃を警戒して、日が暮れても松明<sup>たいまつ</sup>を灯すことができないまま、梶信緝<sup>さんざえもん</sup>・戸田三左衛門<sup>ふじたやすよし</sup>・藤田安義の各隊が散り散りになってしまいました。

梶が率いる一隊は、道に迷いながら藤枝村<sup>ふじえ</sup>（鹿沼市）にたどり着き、休憩をとりました。その後、偶然に戸田三左衛門の一隊と出会い、再会を喜び合いました。二隊は合流して館林に向かい、道に迷いつつも旧幕府軍を避けながら佐野（佐野市）に至りました。

藤田の一隊は壬生<sup>みぶ</sup>（壬生町）・栃木<sup>おおひらさん</sup>（栃木市）を経て、大平山（大平町）付近で館林藩の使者と出会い、宇都宮の状況を説明。佐野まで進んだところで、梶<sup>さんざえもん</sup>・戸田の部隊と合流することができたのです。

彼ら<sup>とねがわ</sup>が利根川を渡って館林に到着したのは、宇都宮城脱出から一昼夜が過ぎた4月20日の夜でした。

その夜は、館林城下とその周辺に宿泊。翌21日には館林藩主<sup>あきもとひろ</sup>・秋元礼朝<sup>とも</sup>に面会。その後、梶は事情説明のために板橋へ出発しました。

先に宇都宮城を脱出していた戸田忠恕<sup>とただゆき</sup>が館林に到着したのは、その日の夜になってからでした。忠恕は、草刈籠<sup>くさりかご</sup>に身を潜めて藩士に背負われるなどの苦勞を重ね、2日以上もかかってたどり着いたのです。

（つづく）

## 戊辰戦争と宇都宮城

### 「安塚の戦い」

旧幕府軍は、宇都宮城の新政府軍を退城させたものの、日暮れとともに宇都宮から蓼沼（上三川町）などまで引き返しています。城や城下町が広範囲に焼失していたからです。

一方、日光（日光市）を目指して北上中だった旧幕府軍の大鳥圭介は、鹿沼（鹿沼市）で宇都宮城の落城を知り、予定を変更して宇都宮へ向かうことにしました。

大鳥の部隊は4月20日に宇都宮へ到着。そのとき、宇都宮城の建物はまだ炎上中で、城下町の家屋は焼失したものが多く、焼け残った家屋も盗賊に荒らされていました。大鳥が率いる兵士の中にも住民に乱暴するものがいたため、大鳥は厳しく取り締まって治安の維持に努めました。

蓼沼まで引き返していた土方歳三・秋月登之助らの部隊も合流し、ここに旧幕府軍は宇都宮城を手に入れたのです。

また、旧幕府軍と連携をとる会津藩（福島県）の兵士は、古賀志山（古賀志町）付近まで南下して戦局をうかがっていました。

一方、板橋（東京都）にあった新政府軍の総督府（司令部）は、下野国（栃木県）での劣勢を挽回するため、援軍を派遣しました。薩摩（鹿児島県）・長州（山口県）・土佐（高知県）・鳥取（鳥取県）・大垣（岐阜県）の各藩と、草莽隊（民間の義勇兵）である山国隊（京都府）などで編成された部隊です。この部隊は、宇都宮城を攻撃するための根拠地として、壬生城（壬生町）を選びました。

4月22日、宇都宮城から出撃した旧幕府軍と、これを迎え撃つ新政府軍が衝突。これが宇都宮城をめぐる二回目の戦いとなった「安塚の戦い」です。

（つづく）

## 戊辰戦争と宇都宮城

### 「旧幕府軍の勢威」

壬生城<sup>みぶじょう</sup>にいた新政府軍の一部は、慶応4年(1868年)4月21日に壬生城を出発して北上。その日のうちに、安塚<sup>やすづか</sup>(壬生町)に到着し、姿川右岸(現在の壬生町側)の守りを固めました。

一方、宇都宮城の旧幕府軍は、壬生城の守備が手薄であるとの情報を得て、攻撃して奪い取ることを企てました。同じ21日に、旧幕府軍の先遣隊は姿川の左岸(現在の宇都宮市側)に進出し、陣地を設けました。

そして、旧幕府軍の主力部隊は、安塚を正面から攻撃する部隊、雀宮<sup>すずめのみや</sup>方面に迂回し東から安塚を攻撃する部隊、そして大きく迂回して壬生城を直接攻撃する部隊に分かれて宇都宮城を出撃しました。

22日未明、風雨の中、安塚を正面から攻撃する旧幕府軍の部隊は、姿川を渡り、安塚集落の北側に差し掛かったところで新政府軍と衝突しました。

旧幕府軍の攻撃は激しく、新政府軍は南におされていきました。

新政府側は、壬生城に救援を要請しました。壬生城にいた鳥取藩<sup>とっとりはん</sup>(鳥取県)の河田左久馬<sup>かわださくま</sup>は部隊を引き連れて安塚に急行しました。

一方、雀宮方面から安塚を攻めるはずだった旧幕府軍の別働隊は、夜の闇と悪天候で道に迷い、戦場にたどり着いていませんでした。

(つづく)



## 戊辰戦争と宇都宮城

### 「新政府軍の反攻」

慶応4年（1868）4月22日未明，風雨と濃霧の中で始まった戦闘は，世が明けても続いていました。

当初優勢だったのは旧幕府軍でした。その攻勢の前に，土佐藩（高知県）・因幡藩（鳥取県）を中心とする新政府軍は，姿川から安塚集落（壬生町安塚）付近まで攻め込まれていました。

壬生城にいた因幡藩の河田左久馬は，安塚での戦闘の報告を聞き，長州藩（山口県）・松本藩（長野県）・忍藩（埼玉県行田市）などの部隊を率いて壬生城を出撃しました。

河田が率いる部隊が戦場に到着すると，新政府軍は反攻に転じました。河田は退却しようとする兵士達を見て，刀を抜き，「退却するものは斬るぞ」といって督励したといえます。

両軍ともに激しい戦いを繰り広げましたが，新政府軍が優勢となり，姿川を越えて旧幕府軍を押し返しました。旧幕府軍は宇都宮城に向けて退却を開始。新政府軍は西川田村（西川田町）まで追撃しました。

そのころ旧幕府軍の別働隊は壬生城下に進攻して，民家に放火しました。壬生城は薩摩藩（鹿児島県）の有馬藤太が守っていました。旧幕府軍は，壬生城を攻略することができず，宇都宮に引き返しています。敵出現の報告を聞いた河田は，部隊を率いて壬生へ戻りましたが，すでに旧幕府軍は退いた後でした。

この日の戦闘について，旧幕府軍の指導者である大鳥圭介自身が「八分の負けである。」と言っている通り，宇都宮城をめぐる戦況を新政府側有利へと転換させるものでした。

（つづく）

## 戊辰戦争と宇都宮城

### 「死傷者の続出」

旧幕府軍による壬生城攻撃は失敗に終わり、戦況は新政府側に有利となってきました。

旧幕府軍の攻撃を退けた新政府軍は、「安塚やすづかの戦い」の翌日、慶応4年（1868）4月23日、宇都宮城を攻撃するため壬生城を出発。北上して宇都宮城の西側から攻撃を開始しました。指揮者は、大山弥助おおやま やすけ（巖いわお）・野津七次の づしちじ（道貫ありまとう た）・有馬藤太さつまはんらで、薩摩藩（鹿児島県）・大垣藩（岐阜県）の部隊が中心です。

新政府軍は六道ろくどうの辻つじ（六道町ほか）に攻め寄せ、ここを守備する旧幕府軍と激しい戦いとなりました。当初新政府軍は苦戦し、指揮官である有馬・野津ですら負傷して後退したほどです。

大山弥助は、頑強に抵抗する旧幕府軍を大砲で攻撃して六道の辻を突破し、佐野口木戸さのぐちきど（西2丁目ほか）を通過して松が峰門まつ みね（松が峰2丁目ほか）に攻めかかりました。

松が峰門は宇都宮城西側の外郭に位置する門です。堀と土塁で固く守られており、この付近に旧幕府軍は主力部隊を配置して応戦。新政府軍も樹木・竹林などを盾にして攻撃しました。

数時間にわたって激しい戦いが行なわれ、旧幕府側の土方歳三ひじかたとしぞうが足に負傷するなど、双方に多くの死傷者を出しましたが、新政府側はここを打ち破って城内に攻め込むことができませんでした。

（つづく）

## 戊辰戦争と宇都宮城

### 「旧幕府軍の必死の守り」

新政府軍と旧幕府軍は、宇都宮城西側の外郭である松が峰門まつ みね付近で激戦を繰り広げていましたが、戦況は一進一退でした。

一方、江戸（東京都）を出発し結城（茨城県結城市）方面を攻撃した後、宇都宮に向かっていた薩摩藩さつまはん（鹿児島県）・大垣藩おおがきはん（岐阜県）・長州藩ちょうしゅうはん（山口県）の兵士たちで構成された新政府軍の部隊がありました。この部隊は薩摩藩の伊地知正治いじ ちまさはるに率いられており、両軍の攻防のさなかである4月23日の昼過ぎに宇都宮に到着しました。

伊地知の部隊は、防備が手薄になっていた宇都宮城の南東側に廻り、下河原門しもがわらもん（御蔵町ほか）から蓮池はすいけ（本丸町）付近を通り、本丸（本丸町）を襲撃しました。

挟み撃ちにされた旧幕府軍は動揺し、一部が城から出て、明神山みょうじんやま（二荒山神社）から八幡山はちまんやま（塙田5丁目ほか）にかけて陣地を構えました。

新政府軍は、伝馬町でんまから新田町しんでん（泉町から清住1丁目）にかけての台地上に大砲を並べ、明神山と八幡山に砲弾を撃ち込みました。にもかかわらず、旧幕府軍は必死に陣地を守り、新政府軍の攻撃を寄せ付けませんでした。

（つづく）

## 戊辰戦争と宇都宮城

### 「新政府軍の勝利」

旧幕府軍は、南側と西側から新政府軍に攻められていましたが、宇都宮城・明神山（二荒山神社）・八幡山に布陣して抵抗していました。

新政府軍の指揮者のひとりであった鳥取藩（鳥取県）の河田左久馬は、この状況を打開しようと、みずから刀を振り上げて旧幕府軍の陣地に突入。鳥取藩・薩摩藩（鹿児島県）・長州藩（山口県）・大垣藩（岐阜県）の部隊もそれに続いて突撃しました。

その勢いに押された旧幕府軍は、明神山・八幡山から東側に追い落とされるかたちになり、兵士は続々と奥州街道方面に逃れていきました。

旧幕府軍の指揮官・大鳥圭介は、宇都宮城内に踏みとどまっていたが、土塁の上から戦況をみて、宇都宮からの退去を決意します。当初の計画通り、日光方面へと向かうことにしたのです。

夕方には、旧幕府軍は各陣地を放棄し、新政府軍の攻撃を避けるため、宇都宮城下から北あるいは北東へ脱出。その後、北西へ道を取り、日光街道を歩いて今市へと向かいました。

宇都宮での戦いは、新政府軍の勝利に終わったのです。

（つづく）

## 戊辰戦争と宇都宮城

### 「消え去った宇都宮」

宇都宮での戦いは終り，戦場は今市（日光市）へと移っていきます。

戸田忠恕をはじめ，宇都宮藩の人々は，館林（群馬県館林市）に退避していたため，4月22・23日の戦いに加わりませんでした。

宇都宮藩の部隊は，館林藩から武器を借用し，宇都宮に向かっていました。ところが，古河（茨城県古河市）まで来たところで，新政府軍が宇都宮城を奪い返したことを知ります。忠恕は，その戦いに参加できなかったことを大変悔しがったといえます。

24日，戸田三左衛門・藤田安義・戸田三男らは宇都宮に帰還。新政府軍から宇都宮城を受け取ります。戸田忠恕が宇都宮に帰還するのは，さらにその後になります。

宇都宮では，城の建物はもちろん，城下町も武家屋敷も，二荒山神社などの寺社までも広範囲に焼失しており，ところどころに戦死者の遺体が横たわるなど，その荒廃ははなはだしいものがありました。

江戸時代の宇都宮は，戊辰戦争の戦火の中で消え去ったのです。

（つづく）

## 戊辰戦争と宇都宮城

### 「新政府軍の再勝利」

慶応4年(1868年)4月23日,新政府軍は宇都宮城を奪還し,主たる戦場は今市(日光市)などへ移っていきました。

5月には上野(東京都台東区)にたてこもっていた旧幕府側の彰義隊(しょうぎたい)が鎮圧され,新政府は東北・北陸地方の制圧に全力を挙げて取り組めることになりました。

旧幕府軍と会津藩(あいづはん)は,8月下旬には下野国(しもつけのくに)(栃木県)から退却。下野国での戦いは,最終的には9月まで続きますが,旧幕府軍などが今市などから退いた段階で大勢は決まっていたものと思われます。

東北・北陸の諸藩も次々と新政府に降り,9月の会津藩の降伏によって,本州での戦いは事実上終了します。

榎本武揚(えのもとたけあき)など旧幕府側の一部の人々は,函館(はこだて)(北海道函館市)を中心として,北海道に別の政権を作ることを計画しましたが,明治2年(1869年)5月に新政府軍に破れ,降伏しました。宇都宮城の攻防で戦った土方歳三(ひじかたとしぞう)もこのとき戦死しています。

激戦の中で多くの悲劇を生みながら,新政府が勝利を収めることになったのです。

(つづく)

## 戊辰戦争と宇都宮城

### 「宇都宮藩の多数の戦い」

宇都宮藩は、宇都宮城奪還の戦いには参加できませんでしたが、その後、慶応4年(1868年)5月には今市(日光市)で、6月には藤原(日光市)で、8月には船生(塩谷町)で新政府側に属して旧幕府軍・会津藩と戦いました。

両軍は強く、新政府軍は苦戦します。しかし、新政府軍の別な部隊が会津若松(福島県会津若松市)を攻めたため、会津藩などはこの方面からの撤退を開始しました。

8月下旬、宇都宮藩の部隊は、薩摩藩(鹿児島県)の中村半次郎(のきのとしあき)の指揮下に入り、土佐藩(高知県)・広島藩(広島県)・黒羽藩(大田原市)・大田原藩(大田原市)と連携しつつ会津に向かいます。

同年8月末から9月初旬にかけて、会津西街道を北上し、横川(日光市)・倉谷(福島県下郷町)・氷玉峠(下郷町など)・関沢(福島県会津美里町)などで、おもに会津藩の部隊と戦います。

9月5日には飯寺(会津若松市)に進出し、会津若松城の攻撃に参加。ここでは、新政府に敵対する長岡藩(新潟県長岡市)の山本帯刀らを捕らえるというできごとがありました。

9月22日、会津藩主・松平容保が降伏し、会津での戦いは終わりました。

宇都宮藩の部隊が宇都宮に帰還したのは、10月上旬と記録されています。

(つづく)

## 戊辰戦争と宇都宮城

### 「六道戊辰役戦士墓」

現在、宇都宮市西原<sup>にしはら</sup>1丁目地内、「六道交差点」<sup>ろくどう</sup>の北東角に「六道戊辰役戦士墓」という石碑があります。

明治元年（1868年）9月8日、宇都宮藩の部隊が新政府軍に属して、飯寺<sup>いいでら</sup>（会津若松市<sup>あいづわかまつ</sup>）に駐屯していたとき、濃霧の中で、会津藩に味方する長岡藩<sup>ながおか</sup>（新潟県長岡市）の家老・山本帯刀<sup>やまもとたてわき</sup>らを捕らえるという出来事がありました。

新政府軍の指揮官である薩摩藩<sup>さつまはん</sup>（鹿児島県）の中村半次郎<sup>なかむらはんじろう</sup>（桐野利秋<sup>きりのとしあき</sup>）は、山本らを死刑にするように命じます。

山本は、宇都宮藩士・戸田三男<sup>とだみつお</sup>に自分たちが持っていた軍用金を手渡し、「何か意義のある使い方をしてほしい」と頼み、死んでいきました。

戸田は、その6年後の明治7年（1874年）6月、旧宇都宮藩士や宇都宮の住人らの協力を得て、山本から託された費用をもとに、旧幕府側の戦死者のためにこの石碑を建てたのです。

新政府軍の戦死者は「官修墓<sup>かんしゅう</sup>」というかたちで手厚く葬られたのに対し、旧幕府側の戦死者は遺体を放置されるなど冷遇されたといえます。

「六道戊辰役戦士墓」は、旧幕府側の犠牲者を供養・顕彰する数少ない遺産のひとつなのです。

（つづく）



## 戊辰戦争と宇都宮城

### 「三国隊」

新政府側についた人々にも、戦争は大きな影響を与えました。

戊辰戦争には正規の藩兵はんべいのほかに、草莽隊そうもうたいと呼ばれる義勇兵も参加していました。丹波国山国郷たんばのくにやまくにごう（京都市右京区うきょう）の農民で編成された山国隊もそのひとつです。

山国郷の住民は古くから皇室とのつながりが強かったため、新政府の呼びかけに応じて、参戦することになったのです。

山国隊の総人数は八十数名、そのうち三十名余りが鳥取藩（鳥取県）の指揮下に入って東へ向かい、各地で戦闘に参加しました。なかでも3名が戦死した慶応4年（1868年）4月22日の「安塚やすづかの戦い」が最大の激戦でした。

年貢減免ねんぐという特典はあったものの、皇室とのつながりを契機に、戦費も自弁で参加した農民たちが戦死したのです。

山国隊は、明治2年（1869年）に山国郷に帰還しましたが、戦費を賄うための負債を抱えており、山林を売るなどして返済したといえます。

「安塚の戦い」で戦死した山国隊士の墓は、鳥取藩の戦死者とともに光琳寺こうりんじ（宇都宮市西原1丁目）にあります。また、4月22日に山国郷では慰霊祭が行われています。

京都三大祭のひとつとされる京都時代祭は毎年10月に開催されますが、その時代行列の先頭には、「山国隊」の姿を見ることができます。

（つづく）

## 戊辰戦争と宇都宮城

### 「戊辰戦争戦死者墓碑」

戊辰戦争では、新政府側・旧幕府側ともに、正規の兵士・民間の義勇兵・徴用された民間人など多数の人々が犠牲となりました。

宇都宮市内にも戊辰戦争で戦死した人々の墓碑が数多く残っています。  
報恩寺(西原1丁目)・光琳寺(西原1丁目)・観専寺(材木町)・安養寺(材木町)・台陽寺(新町1丁目)などには、宇都宮藩の兵士や、宇都宮で戦った宇都宮藩以外の兵士の墓碑があります。宇都宮藩士の墓碑には、宇都宮城をめぐる戦いで亡くなった人のもののほか、会津などほかの場所で亡くなった人の墓碑もあります。

報恩寺にある「戦死烈士之墓」や「戊辰役薩藩戦死者墓」などはとくに規模が大きいものです。

宇都宮藩の領地内から徴用された民間人の戦死者の墓碑は、多くがそれぞれの出身地に建立されていますが、なかには戦死した地に墓碑がある場合があります、現在、福島県白河市や南会津などで確認されています。

(つづく)

## 戊辰戦争と宇都宮城

### 「宇都宮城の解体」

宇都宮城は、戊辰戦争のなかで、大きな攻防戦が行われた数少ない城のひとつとなり、その戦火によって、城も城下町も大きな打撃を受けました。

御殿<sup>ごてん</sup>など城内の主要建築物は、主に慶応4年（1868年）4月19日の戦いで焼失したものとされます。

しかし、門などは耐火性が高かったためか焼失せずに残っており、堀や土塁などの土木構造物は破壊されることなくそのままでした。また、城の西側に広がる武家地については、前面的な焼失には至りませんでした。

したがって明治時代の初期には、宇都宮城は江戸時代の面影をなお色濃く残していたと言えるでしょう。

明治5年（1872年）大手門<sup>おおてもん</sup>・太鼓門<sup>たいこもん</sup>・下河原門<sup>しもがわらもん</sup>・蓮池門<sup>はすいけもん</sup>が払い下げとなり解体されました。続いて明治7年（1874年）に、今小路門<sup>いまこうじもん</sup>・中門<sup>なかもん</sup>が払い下げられることになり、宇都宮城は次第にその姿を消していくこととなります。

（つづく）